

## 直流 RL 回路の解析例

解析方法の基本を理解するために、簡単な直流 RL 回路で説明する。

図に示すように、時刻  $t=0$  でスイッチを閉じ、直流電源  $E$  を RL 直列回路へ接続する場合の回路電流  $i$  を求める。回路の電圧方程式は次式となる。

$$L \frac{di}{dt} + Ri = E$$

上記微分方程式の一般解は、容易に得られ、次式で与えられる。

$$i = \frac{E}{R} + K \varepsilon^{-\frac{R}{L}t}$$

初期条件  $t=0$  時の電流  $i(0)$  が与えられれば、任意の時刻  $t$  での電流は次式で計算できる。その結果によって、抵抗およびインダクタの電圧も導出できる。

いま、初期電流を  $i(0)$  とすると

$$i(0) = \frac{E}{R} + K \varepsilon^{-\frac{R}{L}0} = \frac{E}{R} + K$$

であり、 $t=0$  から  $\Delta t$  経過した時の瞬時電流  $i(\Delta t)$  は

$$i(\Delta t) = \frac{E}{R} + K \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}$$

上式は次のように変形できる。

$$i(\Delta t) = \frac{1}{R} (1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) E + \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} \left( \frac{E}{R} + K \right)$$

第 2 項目には初期電流を含んでいる。理想直流電源は一定であるが、その初期電圧を  $e(0)=E$  と置くと、次式の関係が得られる。

$$i(\Delta t) = \frac{1}{R} (1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) e(0) + \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} i(0)$$

電圧は一定なので、

$$e(\Delta t) = e(0)$$

さらに  $\Delta t$  経過 ( $t=2\Delta t$ ) した時の瞬時電流は

$$i(2\Delta t) = \frac{E}{R} + K \varepsilon^{-\frac{R}{L}2\Delta t}$$

より、次の関係式となる。

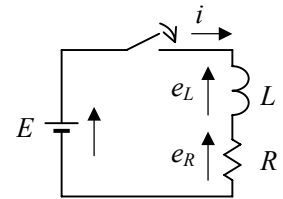
$$i(2\Delta t) = \frac{1}{R} (1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) e(\Delta t) + \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} i(\Delta t)$$

同様に計算すると、時刻  $t=k\Delta t$  時の電流瞬時値は

$$i(k\Delta t) = \frac{1}{R} (1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) e((k-1)\Delta t) + \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} i((k-1)\Delta t)$$

と表すことができる。変数  $e$  と  $i$  に乗じる係数は、時間の刻み幅  $\Delta t$  と回路パラメータが与えられれば定数となるので、初期値が与えられれば、瞬時値に定数を乗じることによって、順次、次の瞬時値が得られ、過渡電流を数値計算によって求めることができる。

電源電圧  $e$  と電流  $i$  を状態変数として、解の関係を行列表現すると次のようになる。



$$\begin{bmatrix} e(t + \Delta t) \\ i(t + \Delta t) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ \frac{1}{R}(1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) & \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} e(t) \\ i(t) \end{bmatrix}$$

変数  $e$  と電流  $i$  を含む行ベクトル

$$x(t) = \begin{bmatrix} e(t) \\ i(t) \end{bmatrix} = \text{col}[e(t) \quad i(t)]$$

を変数ベクトル  $x$  という。また、瞬時値の関係を結びつける行列

$$\Phi(\Delta t) = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ \frac{1}{R}(1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) & \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} \end{bmatrix}$$

を遷移行列という。したがって、瞬時値の関係は、行列表現で次式のように表される。

$$x(t + \Delta t) = \Phi(\Delta t) x(t)$$

上式は、次式で与えられる回路方程式の解である。

$$\begin{bmatrix} pe(t) \\ pi(t) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ \frac{1}{L} & -\frac{R}{L} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} e(t) \\ i(t) \end{bmatrix}$$

行列表現で一般に次のように書ける。

$$px(t) = Ax(t)$$

行列  $A$  は回路状態によって決まる定係数行列である。

ここで、状態方程式の定係数行列  $A$  と、その解を計算する遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  の関係を調べてみる。遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  の要素(2,1)と(2,2)をマクローリン級数で表すと

$$\begin{aligned} \Phi(2,1) &= \frac{1}{R}(1 - \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t}) \\ &= -\frac{1}{R} \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)}{1!} - \frac{1}{R} \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^2}{2!} - \frac{1}{R} \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^3}{3!} - \dots - \frac{1}{R} \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^n}{n!} - \dots \\ \Phi(2,2) &= \varepsilon^{-\frac{R}{L}\Delta t} \\ &= 1 + \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)}{1!} + \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^2}{2!} + \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^3}{3!} + \dots + \frac{(-\frac{R}{L}\Delta t)^n}{n!} + \dots \end{aligned}$$

一方、定係数行列  $A$  の累乗を演算すると

$$\begin{aligned} A^2 &= \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ \frac{1}{L} & -\frac{R}{L} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ \frac{1}{L} & -\frac{R}{L} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ -\frac{1}{R}(-\frac{R}{L})^2 & (-\frac{R}{L})^2 \end{bmatrix} \\ A^3 &= \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ \frac{1}{L} & -\frac{R}{L} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ -\frac{R}{L} & (-\frac{R}{L})^2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ -\frac{1}{R}(-\frac{R}{L})^3 & (-\frac{R}{L})^3 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

であり、 $n$  乗は次式となる

$$A^n = \begin{bmatrix} 0 & 0 \\ -\frac{1}{R}(-\frac{R}{L})^n & (-\frac{R}{L})^n \end{bmatrix}$$

これらの関係から、遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  は定係数行列  $A$  を用いて、次式で計算できる

$$\begin{aligned} \Phi(\Delta t) &= I + \frac{A\Delta t}{1!} + \frac{A^2\Delta t^2}{2!} + \frac{A^3\Delta t^3}{3!} + \dots + \frac{A^n\Delta t^n}{n!} + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{A^n\Delta t^n}{n!} \\ &= \exp(A\Delta t) \end{aligned}$$

ここで、 $I$  は単位行列であり、遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  の要素の値は、 $n=30$  でほぼ収束する。

数値計算では、ある回路動作について、多変数の線形微分方程式から、行列表現の定係数行列  $A$  を導出すれば、 $\Delta t$  間隔における解、すなわち時刻  $t$  と  $t+\Delta t$  における変数の瞬時値の関係を表す遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  を上式によって求めることにより、容易に任意の初期値からの瞬時値を計算できる。

計算の分解能すなわち刻み幅  $\Delta t$  を一定で計算する場合には、一度、遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  を計算しておけば、瞬時値に順次、遷移行列  $\Phi(\Delta t)$  を乗じるだけで、過渡状態の瞬時値を求めることができる。